

☆Live Bar雷神Presents：ばぐーす長谷川のロック向上委員会☆

『第11回：ギターより我を活かす道は無し・Jeff Beck』

～ここで軌跡を統括すベック～

今回はジェフ・ベック・スペシャル！

今年の6月で77歳になるベック大先生。オリジナル・アルバムは2016年からご無沙汰ですが、2018年からちょこちょこ共演しているジョニー・デップとのコラボ・シングル：Isolation（ジョン・レノンのカバー）をパンデミック中の2020年4月にリリースし、まだまだ元気な姿を見せて（聴かせて）くれました。ファンとしては嬉しい限り！

ということで、これからのさらなる活躍を期待して、ベック大先生の軌跡を追いかけてつ現在までの流れをあらためて聴いていきましょう。職人主義と言えるジェフ・ベックのプレイを、あらためて聴きなおすすめ機会になれば幸いです。是非、お楽しみください♪

■Jeff Beckメジャーなお仕事第一弾：The Yardbirds

1: The Yardbirds / I'm Not Talking (Single : 1966)



ブリティッシュ・ビート・シーンの中でも最も重要なバンドの1つであり、エリック・クラプトン、ジミー・ペイジ、ジェフ・ベックを輩出したバンド。ベックのメジャー活動第一弾であり、このバンドが最も輝いていたのがベック期なのだ。

<https://www.youtube.com/watch?v=8zH6itAX6DE>

■初のリーダー・バンドへ：第一期JBG

2: Jeff Beck Group / Plynth (Water Down The Drain) (Beck-Ola : 1969)

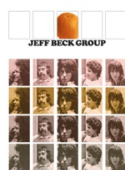


第一期JBGの2nd作。この頃のメンバーはロッド・スチュワート、ロン・ウッド、トニー・ニューマン。傑作との呼び声高い前作：Truthに比べれば評価は低いようだが、ハードでグルーヴィーなR'n'Rという意味ではこの作品に軍配が上がるだろう。ただ、この作品をレコーディングしている時点で既にベックと他メンバーの関係はギクシャクし始めており、間もなくして第一期JBGは終わりを迎える事となる。

<https://www.youtube.com/watch?v=eOkFMbrvgMw>

■バンドとは何ぞや：第二期JBG

3: Jeff Beck Group / Ice Cream Cake (Jeff Beck Group : 1972)



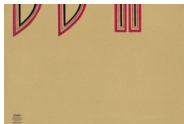
第二期JBGの2nd作/通称：オレンジ・アルバム。スティーヴ・クロッパーがプロデュースした事でも有名な1枚であり、クロッパーにとって、スタックスから独立後の最初の仕事の1つでもある。しっかりとまとまったタイトなサウンドに、狂気のような全員の演奏・グルーブが上手い具合に混ざり合った凄まじい名作。

<https://www.youtube.com/watch?v=N74N-JmjBo8>

■時代遅れの3ピース：BBA

4: Beck Bogert Appice / Lose Myself With You (Beck, Bogert, Appice : 1973)





1969年11月に起こったベックの事故により、暗礁に乗り上げていた企画：ベックとティムとアピスによるバンドが始動。第二期JBGでの音楽性を捨て、分かりやすくヘヴィな音を目指したのがこのBBAである。リードGにリードBにリードDrといった様相で、重戦車の如き突き進むこのトリオが目指したのは“究極の音楽”である。

[https://www.youtube.com/watch?v=Giv\\_pjEyi1k](https://www.youtube.com/watch?v=Giv_pjEyi1k)

■フリー・ウェイなベック：栄光のSolo活動へ  
5: Jeff Beck / Scatterbrain (Blow By Blow : 1975)



マハヴィシユヌ・オーケストラ（ジョン・マクラフリン）、そしてビリー・コブハムのアルバム：Spectrumに触発されたベックが向かった先がこのBlow By Blowだ。この頃の生きがいにならなくなったと本人が言う程、そのSpectrumから流れるサウンドに魅了されたようだ。プロデューサーにジョージ・マーティンを迎え、新たなジャンルを世界に紹介するという素晴らしい功績を残した歴史的名盤。

<https://www.youtube.com/watch?v=9xoC0rHd01w>

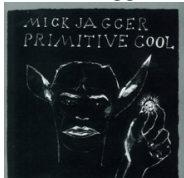
■新たなサウンド模索中につき：時代と闘うベック  
6: Jeff Beck / People Get Ready (Flash : 1985)



第一期JBG解散以来、犬猿の仲だったベックとロッドがここへきて関係を修復。その結果生まれたのがバンドではなく2つの作品だった。それがこの作品とロッドのSolo作への参加である。ただこの作品、とにかく評価が低い。しかし聴かず嫌いは損というもの。まずは、ロッドとのコラボとなるPeople Get Readyの普遍のパワーを聴いてみて欲しい。

[https://www.youtube.com/watch?v=yC\\_j\\_dzkaVE](https://www.youtube.com/watch?v=yC_j_dzkaVE)

7: Mick Jagger / Throwaway (Primitive Cool : 1987)



ミック・ジャガーがベックと絡んだSolo 2nd作。1985年のSolo 1st：She's The Boss、1986年のThe Rolling Stones / Dirty Workを経て、相方Keith Richardsとの確執の中、古巣に安住する事を選ばずSoloへの道を通り抜けた時期である。ベック的には前作：She's The Boss程弾きまくってはいない印象だが、滑らかで達人の成せる印象的なメロディで盛り上げる秀逸なプレイを聴かせてくれる。

<https://www.youtube.com/watch?v=S113bhdXGw4>

■久々に捉えたエネルギー：ベック・インストのピーク第二弾

8: Jeff Beck / Where Were You

(Jeff Beck's Guitar Shop with Terry Bozzio and Tony Hymas : 1989)



トニー・ハイマスとテリー・ボジオを従え、久々のオール・インストとなった作品。ベースを入れない事により、従来とは違う芸術作を完成させた。しかしこの作品も、ベックにとってはほんの通過点。この後、まさかの寡作期に突入。純粋なオリジナル作りリリースまでは10年待つ事となる。

<https://www.youtube.com/watch?v=howz7gVecjE>

■クラブ・ミュージックを目指す：ベック・インストのピーク第三弾

9: Jeff Beck / What Mama Said (Who Else! : 1999)



Guitar Shop以来10年振りとなる作品。広義の意味でのEDMに舵を取った作品で、ベック曰く「レイヴ、ハウス、イビザが狙い...生音なんてどうでも良かった」と発言している。ベックの最終的な狙いはワイルドで新たなサウンドだったのだが、ここではまだ完全にそれを具現化出来てはいない。しかしベックが向かった道のりはかなり刺激的であり、聴く者を圧倒するサウンドに満ち溢れている。

<https://www.youtube.com/watch?v=Uyqhto1N5-I&list=PLDNXxjlb6YGqUq3Y-Q34bIEsnkpW6wwM>

#### 10: Jeff Beck / Nadia (You Had It Coming : 2001)

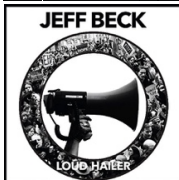


ファンを待たせる事なく、前作から約2年を経てリリースされた作品。前作を踏襲しつつも、そこで聴かれた未完成さとトータル性の欠如はここには無い。ベックはこの作品でようやく現代のサウンドを完全にモノにしたと言えるだろう。破壊的であり神秘的でもあり、東欧風、インド風をも上手くミックスした意欲作/名作である。

<https://www.youtube.com/watch?v=YpqlwRvGeDA>

■現最新作：今後は何処へ向かうのだろうか

#### 11: Jeff Beck / Live In The Dark (Loud Hailer : 2016)



現最新作。これまでも増してゴリゴリのベックが聴ける現代的ブルース・ロック作。久しぶりにメンバーが固定なのも特徴の1つ。そのメンバーとはBones UK (ロージー・ボーンズ&カーメン・ヴァンデンバーグのユニット)。ということで今作はほぼ全曲Vo入り。全然知らない小娘が相手ということで、ここ日本では賛否両論だったようだ。好きか嫌いかは聴く人次第だが、ベックの今後を占う為にも全曲聴いてみては如何だろうか。

<https://www.youtube.com/watch?v=F6dsffOrOoI>